
武装神姫 Lilycal Strikers

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫 Lilycal Strikers

【Nコード】

N3847X

【作者名】

三月語

【あらすじ】

RA同士の衝突で起きた光に飲まれた神姫達。目覚めたのは知らない力や知らないシステムがある世界。

その世界で、彼女達は新たな戦いに身を投じる・・・

武装神姫 BATTLE MASTERS Mk2 発売を記念して・・・

というかもう日経ってますけど、始めました！『神姫？どうせデバ
イスだろ？』なんて思ってる人には『なん・・・だと・・・！？』
と言わせます、言わせてみせます！・・・多分。

（警告タグは後々追加します、絶対）

RIDE00 神姫、消失（前書き）

予告通り始めました（1話も完成したので。後はちょいちょい手直しして・・・です）。

今回は今までの書き方と大幅に変わってます。ある意味新しい試みです。

・・・絶対に『なん・・・だと・・・！？』と言わせてみせるっ！
！

RIDE00 神姫、消失

「てやあっ!」

「当たるものか!」

廃墟、0と1で構成されたそのステージの上で戦う、四人の少女。

片方では白き鎧に包まれた少女―天使型神姫アーンヴァルMk2―が、黒き鎧に包まれた少女―悪魔型神姫ストライフMk2―に切りかかるが、ぎりぎりの所で回避される。

もう片方では・・・

「てえー・・・いつ!?!」

「あ」

「みゅっ!?!」

「・・・だいじよぶ?」

白を中心とし、ところどころにある青が映える鎧を纏う少女―戦乙女型神姫アルトレーネ―が猫っぽい少女―猫型神姫マオチャオ―に向かって突撃した所、盛大に転んだ。

「こうなったら最後の手段!これこそ、天駆ける天使の騎馬!」

アーンヴァルMk2の背部兵装が形を変え、それに乗り上げる。

「グランニューレツ!!」

そして相手のストライフMk2も呼応するように

「殺戮の始まりだ……。碎ける、ジャーヴァル・クルイク!!」

同じように背部兵装に飛び乗る。そしてお互いがお互いへと向かい始めた。

「わ、私だって!!やる時はやる神姫なのですーっ!!」

「そ、そんなやつぱちになったらダメなのによー!!」

突然やけを起こして突撃を始めたアルトレーネに対し、逃げ始めたマオチャオ。

そして、そんな二人の上側で固有レールアクションを発動した二人の神姫が衝突した瞬間。

「ま、眩しいのによー!!何にも見えないよおー!!」

マオチャオだけが感じた、辺り一面を覆うほどの眩しさが辺りを襲った。

そして・・・

「や、やっと見えるようになったよぉ・・・あれ？」

マオチャオの視力が回復し、目を開けてみたら・・・

「あ、あれ！？リーハ！？あのアーンヴァルちゃんとアルトレーネ
ちゃんは！？どこ行っただの！？」

マオチャオの敵であったアーンヴァルMk2とアルトレーネ、そしてリーハと呼ばれたストラーフMk2が姿を消してしまったのだ・

RIDE00 神姫、消失（後書き）

今回はいきなり初戦闘。相手はよくあるあの機械共。

RIDE01 FIRST BATTLE、『あれ？これってなん
です？機械人形ですか？（byエイル）』

「（あんばる2）私達は・・・絶対に負けません！」

「（レーネ）あのー、先輩？名前のところ、平仮名表記になってます
よ？」

「（あんばる2）えっ！？ちょ、マスターっ！！！」

RIDE 01 FIRST BATTLE、あれ？これってなんです？機械！

ついに本編開始です！なんとなくお待たせしました！

今回は白子とレーネの話です。

RIDE 01 FIRST BATTLE、あれ？これってなんですか？機械！

「う……」

辺り一面誰もいない森の中、少女は目を覚ました。

「……ここは……それにあの光……」

きよろきよろと辺りを見回すと、その横に見慣れた存在が。

「え、エイル！？ちょ、ええっ！？しかもなんでなのかは分からないけど大きくなってる！？」

そして少女――アーンヴァル Mk 2、名は『ヴァル』――は慌てて自分の体を見た。

（ヴァル：お、大きくなってる！？地面もいつもより遠くに見える！？）

そしてヴァルはパニックに陥った。本来彼女たち神姫の全長は15cmが基本。なのに今のヴァルの身長は150cmと通常の10倍ものサイズアップを果たしていたのだ。ついでに言うと、もう一人

の少女、アルトレーネの『エイル』の身長も、ヴァルと同じく10倍の151cmになっていた。

（ヴァル：えっと、確かマスターとマスターの彼女さんが練習試合として私とエイル、リーハとニツキ（↑一人取り残されたあのマオチャオである）とで戦って、リーハと固有レールアクションの撃ちあいになってぶつかって、そこから・・・どうなったんだっけ・・・？）

あの時のことを必死になって思いだそうとするヴァル。だが、リーハとの衝突直後から今に至るまでの記憶がごっそりとなくなっていた。

「（なんで・・・！？でも・・・今はそれよりもエイルを起こさないと・・・）エイル！起きて！」

ヴァルは横で眠るエイルを起こそうと体をゆすった。だが・・・

「ふえへえ・・・もう食べられまひえんよお・・・」

完全に夢の中だった。しかも幸せそうな夢。一瞬、ヴァルも起こすのを躊躇ったくらいである。

「・・・ダメダメ！！こんなことで諦めてたら・・・っ!？」

ヴァルは何かがちちに近づいてきていることを直感で悟った。そして未だに『お腹いっぱいれしゅっ』なんて言っているエイルを担ぎあげそこから離脱を始める。足音を立てずに、それでも急いで。

所変わって。

「次元震が起こるなんて・・・やっぱり驚いちゃったな。同時に2ヶ所も。」

「何度も起きているのは分かってるんだけど・・・あの地点で起きたのは初めてかな・・・？小さい方は前に起きたことあるけど。」

次元震が起きた、ということで二人の女性がその次元震が起きた現場へと飛んでいた。

次元震のことですって言うていたのは『エース・オブ・エース』こと、空戦魔導師の戦技教導官、高町なのは。

その隣にいるのは彼女の親友で執務官のフェイト・T・ハラオウン。

「次元震が起きたってことは・・・次元漂流者がまた出たのかな・・・？」

「どうだろう・・・。・・・そろそろ・・・だったかな・・・」

二人は同じ速度で現場へと飛んでいった。

所戻してヴァル（＋エイル）。

「あーん！！もー起きてよエイルう！！」

ヴァルは必死になってエイルの頬を引つ叩いていた。それもそのはず、ヴァルが感じた気配が、自分たちを囲むように動いて言っていることに気付いたからだ。

このままエイルを担いでいては突破はまず不可能。自分がさっきまで使っていた通称『グランニューレセット』もなぜか消失、使えなくなっていることもそれに拍車をかけている。

そして通算１００打目を記録したその瞬間・・・

「ふにゃ・・・？ヴァルふえんふあい、らにあおひひゃんれふは？
（訳：ヴァル先輩、何が起きたんですか？）」

エイルが目を覚ました。両頬が腫れてちゃんと喋れなくなっているが。

「気づいてなかったの！？とにかく、変な所に来ちゃって、それで何かよく分からないけどとにかく追われてて、今囲まれたの！！」

「・・・ふあれ！？おおひふふあつふえる！？（訳：あれ！？大きくなってる！？）」

「気づくのそこ！？」

二人が簡単な漫才をやっている時に、二人を追っていた者が姿を現した（この間に、なぜかエイルの頬の晴れが引いた）。

「ぴぎゃ

っ！？ゆ、ゆゆ、ゆゆゆ

ゆ幽霊ですかぁ！？やっぱりユーレイなんですかぁ！？」

「・・・ピーナッツ？それともアーモンド？それが機械化したもの？なんだろ、あれ・・・」

現れた『もの』に対し、二人はそれぞれ悲鳴を上げたり首を傾げたり・・・

そしてそれは、不意打ちと言わんばかりに二人の方を向き、中央のレンズに光をため始めた。

「（・・・もしかして・・・私達を狙ってる！？）エイル、すぐにそこから飛び退いて！！攻撃が来る！！」

「えっ！？と、飛び退けってどこにですか！？」
「いいから早く！！」

ヴァルがエイルに指示した瞬間、そのレンズから光が放たれた。

「くっ！！」
「ひゃああっ！！」

『回避アクション』で回避し（ヴァルは側転、エイルはヘッドダイビング）、ヴァルはそのまま攻撃に転じた。

「てやつ！！」

アーモンド（ヴァル一時的に名称）にパンチ（バトルマスターズでは神姫に武器を持たせない状態でそのボタンを押すとパンチ攻撃になりますby作者）を繰り返す。が・・・

ガインッ！！

「~~~~っ！！」

側面を殴ったので無論硬く、殴ったヴァルの方にダメージ。

「せ、先輩!？」

いつの間にか体を起こしたエイルがヴァルに声をかける。

「か、硬い・・・」

「よくも先輩をーっ!！」

「ちょ、エイル!ー! 無茶したらダメっ!！」

ヴァルの制止も聞かず、エイルはアーモンド（ヴァル一時的に（r
y）にパンチを決めた。

レンズに。

「ダメ、硬さに負ける!!」

ヴァルがそう思った時だった。

ガシャン!!

『・・・え?』

ジ・・・ジジ・・・ドスン!!

『・・・えー!?!』

レンズを殴られたアーモンド（ヴァ（ry）は2、3回ほど紫電が走ったと思ったら、落ちた。それも、あっけなくと言った感じで。

「・・・これなら！エイル！さっきと同じようにレンズを狙って！ただビームみたいなのに気をつけて!!」

「は、はい!!きゃああ!?!」

返事をした矢先にビームが飛んで来て、エイルはそれを神回避。

「やり方が分かれば・・・武装がなくてもやれる!!たああ!!」

ヴァルはレンズだけを的確に殴り、機能を停止させていく。時たま飛んでくるビームも既に機能停止させたアーモンド（以下略）を盾にして防いだりした。

「くう・・・っ、弱点が分かったと言っても数が多過ぎる・・・！」

しかし、圧倒的な数の暴力に、押され始めた。

「せんぱい・・・倒しても倒しても湧いてくるのですう・・・」
「このままじゃ・・・負ける・・・！」

ヴァルが諦め始めた時だった。

上空に何かが光ったような感じがしたその直後、ヴァルの後ろにその光が降った。癒しとかそういうものではない。とにかく高威力の光が『降った』のだ。

「・・・え・・・？」

ヴァルは今起きた光景が理解できないでいた。突然空から光が降ってきて、後ろにいたアーモンドを破壊したのだから。

ちなみにエイルは自分が叩いていたアーモンドに光が降ったため、腰が抜けて涙目になっていた。

「安全な場所に隠れていてください！！これは私達で対処します！！」

そして空から聞こえた声にハッとなって上を向いた時、二人の人間を見たヴァルであった。

（なのは・フェイトサイド）

「・・・いた！」

ヴァル達が戦い始めてからその数分後、なのはとフェイトがその近辺に着いた。

「次元震反応は確かここで会ってるはず・・・っ！」

「フェイトちゃん、この反応は・・・」

「うん・・・、間違いなくガジェット、しかも一般人もいる・・・！」

フェイトが襲われている人（ヴァル・エイルのこと）を視認した。

「・・・ちょっと待ってフェイトちゃん、あのガジェット・・・壊れてない？」

「壊れて・・・るね・・・。同じ場所をピンポイントで狙って・・・」

既に破壊されているガジェット（ヴァル達は未だアーモンドと思っている）

「押され始めた！？なのは！！」

「うん！」

フェイトの声になのはが杖を前につきだした。

「デイベーン……バスターっ！！」

そして杖から光が発射された。

「……当たった！！安全な場所に隠れていてください！！これは私達で対処します！！」

なのはは二人に退避を呼び掛けた。

これが魔導師と神姫の出会いであつた・・・

RIDE01 FIRST BATTLE、あれ？これってなんです？機械！

真面目だけどこか抜けてる白子のヴァルと、超天然ドジっ子なエイル。二人がついに後の魔王と出会いましたよって。さて、どうなることやら・・・

次回

RIDE02 リーハ、奮戦す

「（リーハ）今回はヴァル達の話が続くと思った人には悪いが、私の話になる。ヴァル達がどうなったか気になった人、すまないな。一応、私の活躍を期待していてくれ。」

RIDE02 リーハ、奮戦す（前書き）

今回は別アングルでの話です。さて、一人別場所へ飛ばされたリーハ。彼女はいかに動くのか？それは本編で！！

今回はちょっとエグイ言葉があります（例：殺戮）。そしてある意味チート回です。それが苦手な人は引き返してください。

RIDE02 リーハ、奮戦す

「・・・ここは・・・何処だ・・・？あたしは確か、バトルをしていたはずだ・・・」

先ほどとは全く違う風景。周りは草原。そこで一人の少女が目を見ました。

青い短めのツインテールのその少女は、ヴァル、エイルと共に光に飲まれた、ストラーフ型Mk2のリーハである。

「・・・考えても無駄か。とにかくここを・・・っ！」

動こうとした時、何かの気配に気付いた。

「・・・少なくとも30・・・一人で切り抜けられるか・・・？」

迫る何かを警戒するリーハ。一歩足を下げた時、首に何かが掛かっていることに気付いた。

「・・・何だこれは？こんなものをマスターから受け取った記憶は・・・っ！」

首にかかる十字架のネックレスに気を取られた直後、何処からか何かが飛んでくる。それを横っ飛びで回避するリーハ。

「・・・まったく。人の思慮をも邪魔するとは・・・」

そして現れる機械。

「・・・ビット・・・というわけではなさそうだな。一体・・・こいつは？・・・分かっていることは・・・」

そして、現れた機械から発せられる、多数のレーザー。

「あたしにとって、あいつらは敵、ということだけだ！さあ、いくぞ！」

リーハは敵に向かって駆け始めた。正面、左右からレーザーが乱れ飛んでくるが、今迄で培ってきたセンスで掻い潜り、敵の内の一体に向かっていく。

「（・・・あいつらが撃つレーザーは、決まってあのレンズから放たれている・・・）・・・それなら・・・！」

短時間で敵の考察を済ませ、機械の真正面に辿り着いたリーハ。

「・・・沈め！」

レンズを殴りつける。レンズを殴られた機械はガシャンと盛大な音を立て、そのまま崩れ落ちた。

「弱点は分かった。が、同じことをし続けていたら流石に日が暮れるな・・・」

一瞬攻撃が止んだその刹那に息を整えた時だった。

【マスター、御手をお貸しいたしましょうか？】
「・・・誰だ？」

突然、機械染みた音声が聞こえた。

【あなたの胸元のネックレスです。名も無き存在なので、自己紹介しかねますことを御了承下さい。】
「・・・このネックレスか・・・。ちっ、のうのうと話をさせてくれないか・・・！」

ネックレスを摘んで見た直後、再びレーザーが飛んで来たため、それを回避。

【マスター、私に名前を頂けますか？】

「名前、だと！？こんな状況で考えつくものか！」

【安直なものでも構いません。】

（戦闘中に敵の考察以外の思考が働く訳が・・・仕方ない、我ながらセンスがないと思うが・・・！）

リーハは意を決したように、ネックレスに向けて言った。

「お前の名前は『トイフェルデUNKELハイト』だ！それでいいな！？」

【構いません、恐縮です。】

「で、デUNKELハイト！一体どうする気だ！？いつまでも避け続けるのはあたしにも無理だ！」

【私を握りしめ、『セットアップ』と申してください。そうすれば、私が貴女の力になりますので。】

デUNKELハイトにそう言われるが、リーハは何も言わない・・・いや、言えないのだ。

（人前で『セットアップ』などと叫ぶ！？そんな馬鹿なことが出来

るわけが・・・ないだろう！！は、恥ずかし過ぎるじゃないか！！）

そう、リーハは気心知れたもの（彼女のマスター、ヴァル、そしてヴァルのマスターくらいである）の前以外では『クールな神姫』を演じてしまう。ただの恥ずかしがり、という点もあるが。

【この際羞恥は放棄なさって下さい！おめおめと倒されてしまっても宜しいのですか！？】

「~~~~~っ！！でゆ、デューンケルハイト、絶対に録画・録音なんてするなよー！！」

【心得ております。】

「トイフェルデューンケルハイト、セット・アップ！！」

セットアップと叫んだ（最早この辺やけくそな気がしたのは気のせい）リーハを、光が包む。

その体を、彼女にとって馴染みのあるアーマーが包んでいく。

「・・・なるほどな、デューンケルハイト、中々粋な事をしてくれるな。」

【御褒めに預かり至極恐悦です。】

現在の彼女の姿は、『ストラーフMk2』一式セットの、リアが『FL017リア グリーヴァ』だった。

「・・・デュンケルハイト、グリーヴァで一掃する。いいな？」

【全ては貴女の意のままに。】

「そうか・・・。なら・・・殺戮の始まりだ・・・！」

グリーヴァをマウント状態から解放し、構える。

「はあぁっ!!」

そして、グリーヴァを横薙ぎに一閃。その範囲にいた機械は全て切断された。まるでバターを切り取るかのように・・・

「殲滅するぞ・・・！はーっはっはっはっは!!」

高笑いと共に敵を斬っていくリーハ。その様はまるで悪魔そのものだった。

数分後。

【・・・マスター、敵反応ロストしました。】
「そうか。・・・ここに長居するのはよくないだろうな。とにかく

まずは街へ移行。話はそれからだな。」

【そうですね。私もそれに賛成します。】

その後、後になのはからの報告を受け、調査のためすぐに数名の魔導師達がリーハがいたその地点に派遣されたが、そこにあつたのは

まるでバターのように切られたような斬り跡が残された機械の残骸
だけであつた・・・

RIDE02 リーハ、奮戦す（後書き）

今回、リーハがデバイス起動しました。

名前はドイツ語で『闇の悪魔』という意味です。ちなみに「グラーフアイゼン」が『鉄の伯爵』だから、という感じでつけました。文法？気にしない方向で。

次回、RIDE03 いざ行かん、機動六課！なのです！

ついでにおまけ。

ある理由で調べてみたのですが、エイルつて・・・ヴァルキュリアの名前の一つだったんですね……。偶然つけてました……

ちなみに武装紳士の方ならご周知かと思いますが、アルトレーネの武器、スキルや固有レールアクションについての話なんです……

北欧神話から来てる場合が多いんです。例としてあげるならば……

ゲイルスケイグル（アルトレーネ固有レールアクション）……「槍の戦」の意味を持つ、ゲイルスコグル（ゲイルスケグルでも可）から

ブリュンヒルデ（アルトレーネのゲイルスケイグル接続部分の一つ）……「輝く戦い」の意味を持つブリュンヒルデから

ランドグリーズ（バトルロンド、アルトレーネのカウンタースキル）……「盾を壊すもの」の意味を持つランドグリーズル（ランドグリーズでも可）から

レギンレイヴ（バトルロンド、アルトレーネのスキルの一つ）……「神々の残されたもの」「神々の娘」の意味を持つレギンレイヴ（

レギンレイヴルでも可)から

ニールベリング(アルトレーネリアパーツ)・・・「霧の国の人」の意味を持つ。北欧神話におけるニブルヘイム(冥界)。

他にもあります。・・・エイルがまさかヴァルキュリアの名前の一つだとは思わなかった・・・

「(エイル)私はヴァリユ・・・ヴァルキュリアの一人なのです! 型番にも戦乙女型とついているのですよ!？」

「(ヴァル)普段ドジっ子だからそう見られないんじゃないのかな・・・? 一部では牛井とか言われてるよ・・・?」

RIDE03 いざ行かん、機動六課！なのです！（前書き）

3話目です。ついに機動六課に向かうのです！

ついでにちょっとゲストを。そこはまあ、天の声とってくださいあ。

RIDE 03 いざ行かん、機動六課！なのです！

ヴアルとエイルの目の前に突如として現れ、エイルの腰を抜かした女性。そしてその隣にいる、もう一人の金髪の女性。

彼女達二人が二人を援護した瞬間、戦況が一変した。

「だが、あえてその戦闘は省略させてもらうのですう！」

「酷いのですー！」

「仕方ありませんわ。こればかりはどうにもならないのですから。」

「だってあまりにもワンサイドゲームすぎるですよ！？アーモンドなんてわずか数分で全滅ですう！！」

「とは言っても省略は無いのです！！」

「戦いは数ですわ、姉様！！・・・言ってみただけですけどね。」

「もう知らないのです・・・。批判されても何も言わないのです・・・。」

「あの、大丈夫でしたか？」

「え、あ、はい。大丈夫です・・・」

ヴァルは目の前にいるサイドポニーの女性に手を引かれているエイルを見ながら、返答した。エイルはまだ腰が抜けているようだ。

そしてヴァルは・・・混乱していた。

（ヴァル：え、えと、この人、空を飛んでた！？私たち神姫は空中ダッシュスキルがあれば出来るものなのに、そんなのがない感じが！？）

「あのー・・・」

「へえあ！？は、はい、なんでしゅか！？」

混乱＋思慮状態の時に栗色のサイドポニーの女性に顔をのぞきこまれ、素っ頓狂な声を上げるヴァル。突然、ということもあって噛んでもいた。

「えーと・・・一緒に来てもらえるかな？色々とお話を聞きたいから。」

「え、あ、はい。その程度なら構いませんけど・・・それよりエィ

ルは・・・」

ヴァルはエイルを改めて見た。そこに映ったのは・・・

「あうあうあう・・・」

涙目で腰が抜けていて、再びへたり込んでしまっている、探していた本人だった。

「あー・・・怖がらせちゃったみたい・・・かな？」

「そうみたい・・・です。」

「じゃあ、いつしよに来てくれるってことで・・・いいかな？」

「はい。」

とりあえずこの人たちに敵意はない。そう考えたヴァルはつくづくことに決めた。

「じゃあフェイトちゃん、私もう一つの次元震発地点に行くね。」

「うん。気をつけてね、なのは。」

そして、なのはと呼ばれた女性は別の所に飛んで行った。比喩表現とかではない。飛翔したのだから。

(・・・やっぱり飛んだ……。どういう理屈でなんだろう・・・)

理由が分からなくてぼーっと彼方を見つめるヴァル。

「じゃあ、行こっか。ついてきて?」

フェイト、と呼ばれた女性に従ってヴァルは(腰抜け状態のエイルを引っ張り上げて支えてから)歩き始めた。

エイルは・・・面倒になったので足を引きずっていった。

(ヴァル：それにしても気になるのは・・・耳のイヤリング……。全ての武装が消えたのに、なんでこれだけ残ってるんだろう・・・)

ヴァルは耳のイヤリングについて考えてみたが・・・結局答えは出ずじまいだった。

「・・・ほえー・・・」

所変わって、移動したその先。腰砕けから回復したエイルは建物を
見上げて声を漏らしていた。ただ、「ほえー」と・・・

「えつと・・・ここは・・・？」

「ここは時空管理局の「古代遺物管理部 機動六課」。私やなのは・
・えと、さつき二人を助けた人・・・の友達が設立した部隊なん
だ。私もここで働いてる。」

「機動・・・六課・・・ですか・・・」

相変わらず「ほえー」としか言わないエイルをよそに、ヴァルがフ
エイトと話を進めていく。ちなみに移動中の車で軽く自己紹介をし
ていた。ちなみにヴァルは咄嗟の偽名で「ヴァル」フロントライン
と名乗った。エイルはヴァルが適当に「エイル」ブリュンスタッド
とした。ちなみにばれてない。上手くヴァルが間を開けずに答えた
からだ。

「じゃあ、ヴァル。私は報告に行くけど、ついてきてくれる？」
「あ、はい。分かりました。」

向かおうとした時にエイルのことを思い出し、エイルを呼んだ。エ
イルは呼ばれて向かおうとした時、見事に脚を纏れさせて『みゅっ
！？』という声とともに転倒した。

一方、別行動のなのは・・・

「次元震があつたのはここだけど・・・何が・・・あつたの・・・？」

次元震があつた場所・・・つまり、リーハがいた場所に着いたのはが目にしたのは、本来ありうることはない事態だった。

「ガジェットが・・・マーガリンを取る時みたいに斬られてる・・・」

リーハを襲っていた敵・・・ガジェット的にいえば惨劇の残骸だった。

「あの二人みたいにやったんじゃない、これは・・・質量兵器・・・？うん、魔力があるからそうじゃない・・・じゃあ一体どうやって・・・」

既に行動することのないガジェットにより、なのはは調べてみる。見事と言わんばかりの斬り跡。自分の兄ですらここまでのことはできないだろう、と直感した。

「これは・・・はやてちゃんにすぐ報告しなきゃ・・・！」

なのはは踵を返し、すぐに六課へと戻っていった。

六課内。既に問題が起きていた。

「あれ？エイルは？」

「あ．．．もしかして．．．逸れた．．．？」

エイル、行方不明に。しかも気が抜けた．．．というか一瞬気を反らしたその瞬間だった。いなくなったのは。

「は、初めて来た人には広いとこだから．．．迷子になっちゃうよ！？」

「で、でででも一体どうすれば！？私だって初めてですから同じ

目に遭いかねませんよ!？」

パニックになるフェイトとヴァル。その打開策がなかった。

一方その頃エイルはというと・・・

「おおー・・・」

偶然迷い込んできた訓練室の真っ只中にいた。誰もいない訓練室。十分過ぎる広さのその場所に、ぽつんと立ちつくしていた。

「広いのです・・・。アリーナと比べたらどっちが大きいのでしょうか・・・」

ぽーっと突っ立ってきよろろと見て回るエイル。まるで子供のように。

「先輩たち、どこに行ったのですか・・・？やっぱり私・・・逸れたのです・・・」

結局立ち尽くすだけしかないエイルだった。

10分後、フェイトが「一人で探しに行く、ヴァルはこの場所で待機」と決めて探しに来て、見つかった時にエイルが号泣したのはまた別の話。

RIDE03 いざ行かん、機動六課！なのです！（後書き）

今回は私の武装神姫BM2から、

「イーダ型」のレイヴイー、

「マリーセレス型」のレスティ、

「アルトレーネ型」のルース

に友情出演してもらいました。 ついでに言っとパロディ名言をも。

「（レスティ）まったく面倒だったのですう。 急なお願いは困るのですう！」

「（レイヴイー）ホントですわ！・・・ああもう、本当なら今頃はお茶を楽しんでいましたわ！」

「（ルース）・・・皆さん、本当に申し訳ないのです・・・あそこだけは・・・」

次回はちょっと解説的なものをば。二人のちょっとしたデータも出ます。

RIDE04 二人の今後（前書き）

今回は流していただいてもいい感じな回です。本当に説明回、みた
いなものなので。

RIDE04 二人の今後

「・・・以上が、今回の大規模な次元震の報告です。小規模な次元震については高町一等空尉の報告待ち、ということ。」

「了解や。フェイトちゃん、お疲れさん。」

部隊長室。そこでフェイトははやてに報告をしていた。ヴァルとエイルがいた次元震観測場所の出来事を逐一。

なお、ヴァルとエイルはフェイトの後ろにいる。エイルは・・・なんとというか周りを忙しくきよろしていた。

「・・・ほんなら、ちょおお話があるんやけど・・・ええかな？」

「お話・・・ですか？」

「せや。・・・まあ、簡単な検査を受けてもらうつちゅうだけなんやけど。」

ちなみに自己紹介はすませている。余談だが、初見でエイルがはやてに「タヌキ？」といったのがショックだったのか、数分「そう見えるんか・・・。私はタヌキなんか・・・」と落ち込む、という事態が発生し、フェイトとヴァルが二人で慰めるという光景があった。なお、エイルは無自覚。

「検査・・・ですか・・・」

「さっきから気になっとるんやけど・・・そのヴァルちゃんという

イヤリングとエイルちゃんというチョーカーがな？デバイスのような気がして。」

「・・・デバイス？」

キョトンとするヴァル。ちなみにエイルは立ち寝を始めてしまっていた。なんとなく寝顔が可愛かったと、後にはやては語る。

「あ、デバイスについてまだ何も説明してなかったつけ。デバイスっていうのは私達が魔法を使うために必要なものなんだ。例えば・・これ。私の場合はバルディッシュ。」

「Nice to meet you , Ms .」

「えと、これが・・・？」

フェイトの手元のアクセサリのようなものを見ておっかなびつくりのヴァル。

「それと・・・私達と何の関係が？」

「ヴァルちゃんのイヤリングとエイルちゃんのチョーカーがデバイスじゃないか、って話があがつとんの。調べさせてもらえれば分かるんやけど。」

「は、はあ・・・」

「で、そのついでに二人の魔力も測っちゃおう、って寸法や。」

なんか段取り良すぎるな・・・と思うヴァル。

「で・・・元の世界に帰りたいんだよね？」

「はい、それはもちろん。」

「今ヴァルちゃん達の世界を調べとるんやけど、如何せん手掛かりがないもんやから時間がかつとるんや。もし魔力があつての話やけど・・・民間協力者として六課に入ってくれへん？」

「はやて・・・人不足なのも分かるけど、誰彼構わずっていうのはちょっと・・・」

「ま、まあ、時間がかかるといふことなら、協力しますけど・・・」
「ホンマか？」

「けど、どこまでやれるかは分かりませんよ？」

「いや、そこは気にせえへんよ。手伝うてもらえるだけでいいんや。」

「

元の世界が見つかるまでの協力、ということでは話がついた。

で、ヴァルはイヤリングを、エイルは（ヴァルが）チョーカーを渡し、寝たままのエイルを背負いながら部屋を移動。魔力測定を行った結果・・・

ヴァル・・・B

エイル・・・C

という結果が出た。

そして、イヤリングもチョーカーもデバイスということが判明したが、それがインテリジェンスデバイスなのか、ということが分からないのだ。AIが積み重ねている形跡はあるが、喋らないのが原因だ。

「ヴァルのイヤリングも、エイルのチョーカーもデバイスって結果が出たみたい。けど・・・これがインテリジェンスと言っているのかが分からないみたい・・・」

「インテリジェンス？」

「・・・ほえ？デバイスとかインテリジェンスとか・・・もう全く話がかんないのです・・・」

エイルは仕方ないとして、ヴァルは疑問顔でフェイトに聞く。

「インテリジェンスっていうのは、さっき見せたバルディッシュみたいにAIを積んだデバイスのこと。デバイスと対話ができるから扱いやすいように思えるけど、性格があるから逆に使用者を選んじやう、ということが問題かな？」

「は、はあ・・・（なんか神姫と同じ様な感じだなあ・・・）」

現在通路を歩いている三人。まだなのはが仕事中、ということでは

エイトが案内しているのだ。なおなのは現在はやてに報告中。

「で、今度は実際に戦ってもらうけど・・・いい？」

「えっと・・・誰とですか？フェイトさんだと確実に勝ち目ありませんよ・・・？」

「私はいわゆる試験官のようなもの。訓練室でガジェットと戦ってもらうだけ。」

「ガジェット・・・ああ、あのアーモンドみたいなあの機械ですか？」

もうアーモンドで定着しているヴァルであった。

「アーモンド・・・まあ、それで合ってるかな？それと戦ってもらうから。」

「はい、分かりました。」

「じゃあ、どっちから始める？」

「・・・私から行きます。」

先に行くといったのは、ヴァルだった。

「先輩・・・大丈夫ですか・・・？」

「大丈夫・・・なはず。けど・・・やるしかない・・・！」

その眼に諦めの色が浮かぶことはなかった。

RIDE04 二人の今後（後書き）

次回はヴァル、エイルがバトります！相手はガジェット。

ヴァルは単騎奮戦し、エイルは局の伝説になる！？

楽しみに！！

RIDE05 ヴァル、孤軍奮闘。エイル、奇跡を起こす戦乙女に。（前書き）

ガジェットと模擬戦します！一体何が起きるのか？・・・特にエイルに。

それは本編で！

あと後書きでアンケートとります。

RIDE05 ヴァル、孤軍奮闘。エイル、奇跡を起こす戦乙女に。

模擬戦用の場所でヴァルは一人、立っていた。

『ヴァル、準備はいい？』

「えーと・・・デバイスの起動って一体どうやってやるんですか？」

インカムから聞こえてくるフェイトの確認に、ヴァルはある質問をした。単純な質問、デバイスの起動だ。

『簡単だよ。デバイスと『セットアップ』と言うだけ。名前決める？』

「ええ、まあ・・・では・・・行きますー！」

耳から外したイヤリングを握りしめ、ヴァルは言った。

「ムーンエンジェル、セットアップー！」

「Get Set, Ride on！」

右手を掲げた彼女を、光が包む。

光の中で、彼女の纏うものが変わっていく。

光が消えたその所にいたのは、デバイスセットアップが完了したヴアルだった。

フルアーマーコンプリート
「完全武装完了。」

「・・・すごい・・・」

彼女が纏っていたのは・・・

頭部：ヘッドセンサーユニコーン

胸部：F1016 チェストガード

腕部：F1016 Lガントレット

腰部：ヴァリア・シオン

脚部：LGパピオン

足：ロントラシューズ

背部：RU・シンペタラス

盾：デイク・シールド

だ。

「・・・まさかこの一式だなんて・・・」

『ヴアル、準備はいい？』

「はい、いつでもいけます！ー！」

フェイトがセッティングをし、後はスタートを待つだけとなるヴァル。目の前に表示された画面の内容を見て、確認するだけだ。ターゲットはガジェット、その数10。

『じゃあ・・・スタート!』

フェイトのスタート号令。

「ムーンエンジェル、左にアルヴォPDW、右にライトセイバーを！」

「アルヴォ、ライトセイバー展開。」

感覚で分かる。こういうふうになれば武器が呼び出せるということ。ヴァルは流れるように左手にアルヴォPDWを、右手にM8ライトセイバーを呼び出した。

「いきます!!」

ヴァルは目の前にいるガジェット3体の所に駆けていった。

「あ、あれと戦うんですか！？無理なのです！絶対勝てないのです
！！」

エイルはかなりテンパった様子でフェイトに文句的なものを言っていた。

「多分大丈夫だと思うよ。魔力ランクに合わせて測定するから。」
「でもでも！流石に無理なものは無理なのです！！」

それでも必死に食らいつくエイル。やりたくないの一心が目に見えていた。

「おー、やつとるなー。」

「あ、はやて。なのはからの報告は？」

「ちゃん聞いて、まとめ終わつとるよ。ちょーつと気になる所もあつたけどな。お、5つ目をやつつけたみたいやな。」

「そうだね。ところではやて、その気になる所つて？」

ヴァルを見ながらフェイトが聞く。

「なのはちゃんからの報告やとな？ちつさい方の次元震のところに現れたガジェットが、まるでマーガリンを容器から取り出したように斬られとつたらしいんよ。最初の方はヴァルちゃん達が倒してたみたいに、レンズが壊れとつたみたいやけど、途中から戦い方を変えた、というのがなのはちゃんの推測やね。魔力反応もあつたことやし、多分ヴァルちゃんやエイルちゃんみたいな次元漂流者やろね。」
「そっか。それで、なのはは？」

「別の所で教導中や。」

二人の話を小耳にはさむ感じで聞くエイル。しかし、理解は出来て

い
な
か
っ
た。

一方ヴァルは・・・

（ヴァル：敵ターゲットは総数10、倒したのは8・・・残り二体。どう倒すべきだろうか・・・？）

建物の陰に隠れ、攻撃をやり過ごしながら思考を張り巡らせる。

（ヴァル：アルヴオは残弾がギリギリ、例え撃つたとしてもかき消される可能性が大きい・・・。レーザーソードも使えるかどうか・・・。。。。なら・・・！）

ついにヴァルは行動に出た。

「いきますよーっ！」

建物の陰から出て来た時、背部のシンペタラスがなくなっていた。

「お、ついに動くみたいやね。・・・おろ、背中にあったのがなくなつとるね・・・」

「・・・どこに行つたんだろ・・・？」

フェイトとはやてがシンペタラスを探す。しかし見当たらない。

「・・・あ、あそこです！」

エイルが指さして言った。その先にはガジェットがいて、さらにその後ろには・・・

「あれ、ヴァルちゃんの中腹にあつたやつや！ううん、形が違ってる！」

「まさか、あれって独立して動くもの！？それともフォトンランサーみたいなもの！？」

滑らかな動きでガジェットに迫るシンペタラス・・・いや、その形は既に違っていた。

「あれは・・・ラファールなのです！」

「エイルちゃん、知つとるの？」

「はい、何度も一緒に戦っているのだから分かります。もしかしたら・・・最後の賭けに出たと考えるべきなのです。」

エイルの話の間に一つ、ガジェットが落ちた。

（ヴァル：これが最後の一機・・・！これで決める！）

ラファールはヴァルに接近して、彼女の近くで速度を落とした。ヴァルはジャンプし、ラファールに飛び乗る。

「これこそ・・・天駆ける天使の騎馬！グランニユーレっ！！」
「レールアクション」グランニユーレ”、始動。」

ヴァルはガジェットに向かって突撃していく。ガジェットもレーザーを撃ってくるが・・・

「オートプロテクション、展開。」
「効きません！」

全て防いでしまう。

そして、ガジェットと衝突した。突っ込まれたガジェットは方物線を描いて飛んで行き、墜落した地点で爆発した。

「”グランニユーレ”終了。敵の殲滅を確認。」

「そのようですね・・・」

肩で息をしながら、中央でラファールから下りるヴァル。同時にブザーが鳴った。

『ヴァル、上がってきて。』
「はい。」

フェイトからの指示を受け、ヴァルは上に上がった。

「凄かったなあ・・・ヴァルちゃん。あんな大技隠しとったとは思
えんわなあ・・・」
「うん・・・。あ、結果が出たよ。」

表示された結果は・・・

基礎戦闘技能：S
属性：無
戦略構築能力：A A +
空戦適正：A
陸戦適正：A
魔力測定値：B

瞬間最大魔力観測値：A

スキルレベル

グランニユーレ：A+

一刀両断・白：未測定

デイヴァインソード：未測定

unknown

総合：A

だ。

「・・・最後のunknownがめっちゃ気になるんやけど・・・」

「けど、彼女が凄いつても分かったね・・・。魔力測定値以上のスキルレベルの技もあつて、戦技適性はどちらもA・・・」

「あ、次はエイルちゃんな？下降りてくれんな？」

「ふえっ！？え、あ、その、お、お断りさせてもらいたいです・・・」

「却下な？」

えうー・・・と言いながら涙目でエイルは下に降りていった。途中でヴァルとすれ違いヴァルは疑問符を持って階段を登ってきた。

「えーと・・・エイルに何かありました？」

「んとな？ちょーっとお断りを・・・なんて言ってたから却下したっただけやで？」

「・・・それは・・・泣きますよ・・・」

哀れ、
と
思
っ
て
ヴ
ァ
ル
は
エ
イ
ル
に
心
の
中
で
合
掌
し
た
。

「こんなの無理ですよ．．．」

『エイル、準備はいい？』

「何の準備も出来てないので．．．心の準備も．．．」

『あ、あはは．．．』

返ってきた泣き言に苦笑するフェイト。

『エイル、ここはぐつと我慢してやってみて？終わったらきつと何かいいことあるから。』

「うう．．．はいなのです．．．」

ついに諦めを悟ったか、エイルは頷いた。

「．．．もうこうなったらどうにでもなれなのです！！ヴァイスヴアルキリー！セットアップ、なのです！！」

「Get Set, Ride on!」

ヴァルと同じ様にエイルの体も包まれる。違うのは、右手を掲げていない、ということ。チョーカーだからそこは何もしないで済んでいたのだ。

そして、彼女もまた、姿を変えた。その姿は．．．

頭部：フレイアヘルメ

胸部：ヴァイスプレスト

腕部：ヴァイスカフス

腰部：名称不明な長めのドレスっぽいスカート

脚部：ヴァイスグリーブ

背部：ニーベルング

その他：ヴァイスチョーカー、ヴァイスシウルター

だ。何故かスカートがあるが、それは不明だ、という話。

『じゃあ・・・スタート!』

「か、かかってくるのです!!」

ジークリンデを右手に呼び出し、構えるが・・・

「・・・」

シリ。

「・・・(づるづる)」

シリ。

「・・・やっぱりダメなのですぅっ!!」

逃げた。それはそれはもう、脱兎のごとく。

なお、その光景にはやてはずっこけたかどうか。

「・・・エイルちゃん、開始早々敵前逃亡って・・・ある意味流石やとしか言いようがないやね・・・」

「しかも相当速いよ？普通の人が出せるかどうかの速度で走ってるし・・・あ、建物の中に入った。」

「エイル・・・」

はやてとフェイトは苦笑いし、ヴァルは手すりに手を突いて頭を垂れていた。

「・・・あれ？」

「なに、はやて？」

ふいにはやてが何かに気付く。

「・・・なあ、フェイトちゃん？ガジェットって確か、魔力値Cなら5体だったはずやよね？」

「う、うん。そうだけど・・・」

「あたしの身間違いやなければ・・・あのフィールドに軽く30体くらいおらん？」

「・・・あ、あれ！？もしかして設定間違えた!？」

「こつ、この状態を脱出できる武器はないのです!？」

「My recommendation is Sturm und Drang!」

「しゅ、シュツルムウントドラング!? あ、あれはバズーカなのです!！」

「No, problem. I assisting for you!」

ヴァイスヴァルキリーがアシストをする、ということでエイルは渋々・・・というかなり嫌そうに戦うことにした。

「・・・行くのです・・・ターゲットは・・・どこなのです?」

「Target, lock on. Please fire!」

「分かったのです! いっけー! なのです!」

放たれた魔力バズーカは綺麗な放物線を描いてガジェットの群れに落ちていく。そして、綺麗な白色の爆風を作り上げた。

「ほえー・・・当たったのです・・・」

「Target's lock come! Must run away!」

「せ、戦略的撤退なのです!!」

建物から飛び出したエイルは空中を走って別の建物へと逃げ込んだ。
ついでにその建物の裏側を破壊してさらに逃げ、また隠れた。

「エイルちゃんて、なかなか策士やね……。遠距離から魔力砲撃つて、気付かれたら逃げてまた隠れて……。攪乱するの得意なんかな？」

「いえ、ただの逃げ腰になっただけだと……」

と、ヴァルが返した時だった。『ふええくん！』という鳴き声が聞こえたのは。

「か、囲まれちゃったのですう!!こ、今度こそピンチなのですか、これ!?!」

「Master, I suggest that you use Geirscogul.」

「・・・もう、やるしかないのです?!」

「Yes.」

空白に返されるエイル。もうやけっぱちになった彼女は・・・

「もうこの際どうなっても知らないのです!凄いのいっちゃうので

す!!」

「M o d e c h a n g e , C o d e = v a l k u r e .」

機械的なヴァイスヴァルキリーの声に呼応するように、ニーベルングが展開し、姿が変わる。

モード・オブ・ヴァルキリー、フリーユゲルモード。今のヴァイスヴァルキリーの姿である。

「R a i l A c t i o n .」

ジークリンデと左副腕の盾『ブリュンヒルデ』を合体させて、一本の槍にする。そして、それを投げる体制に持ってきて・・・

「ゲイルスケイグルっ!!」

投げた。ただ・・・本来のゲイルスケイグルはブリュンヒルデを喫先として投げるのだが・・・

「M a s t e r , d i r e c t i o n a r e r e v e r s e .」
「えっ!?!」

何を混乱したか、「ジークリンデを穂先として」投げてしまったのだ。

「あーっ！？ちょ、ちょっとタンマなんです！ミスしちゃったのです！なかったことにしてほしいのです！！」

しかしゲイルスケイグルは止まらない。ガジェットにか擦りもしないまま残り多数の中央に落ちたその槍は・・・

盛大に爆発した。

「きゃっうっっ！ー！」

爆心地近くにいたガジェットは当然全壊。投げたエイルにもかなり強い風圧が掛かっている。

「ゲ、ゲイルスケイグルに爆発効果・・・!?」
「・・・凄いもんを見てもうた気分や・・・」
「こんなことって・・・あるんだね・・・」

フェイトの前にある画面には『ガジェット、全滅』の文字があった。
あの一撃で残っていたガジェットが全て壊れたのだ。

「・・・はやて、結果が出たよ・・・」

「ど、どれどれ・・・ってなんやこの結果!？」

はやてが驚愕した結果。それは・・・

基礎戦闘技能：C

属性：爆

戦略構築能力：D

空戦適正：C

陸戦適正：C

魔力測定値：C

瞬間最大魔力観測値：S

スキルレベル

ゲイルスケイグル：SS

ランドグリース：未測定

レギンレイヴ：未測定

総合：計測不能 エラー 計測不能

だった。

「あ、あの槍にあんなスキルレベルがあつたなんて・・・思えんわ・・・」

「う、うん・・・」

この日、エイルは『時空管理局史上、最も異常な数値を叩き出した次元漂流者』として絶対に塗り替えられることのない伝説として名を残した・・・

おまけ

「あ、なんか運数値も出てるで？」

「・・・運：SSS・・・ヴァルでもBだったのに・・・」

「・・・もうエイルちゃんって規格外なんやね・・・」

「・・・ドジが幸運って・・・」

はやて・フェイト・ヴァルが結果を見て愕然としていた・・・

RIDE05 ヴァル、孤軍奮闘。エイル、奇跡を起こす戦乙女に。（後書き）

今回はフォワードと初めて会います。そしてお待ちかね？のレーネさんと言ったらなネタが。

アンケートですが、StSでギンガが出てくる頃に1〜2人ほどキヤラ追加しようかと思っています。

それで、どの神姫がいいか、というのをまず募集します。

ただし、条件として『武装神姫 BATTLE MASTERS Mk2』に参戦確定している神姫に限ります（現状況ではムルメルティアまでが確定してます）。

期間は12月9日まで。感想をお願いします。

RIDE06 神姫二人、食堂初体験！そしてフオワードと初会合（前書き）

今回はいつもの予定を前倒ししての更新なのです。後書きで募集の結果発表を行いますのです！！

RIDE06 神姫二人、食堂初体験！そしてフォワードと初会合

「フェイトちゃん、どう？」

「なのは。教導は？」

「休憩中。その時にさっき助けた二人がガジェットを相手に模擬戦してるって聞いたから見に来たんだけど・・・」

フェイトが模擬戦の後始末をしている時、なのはが来た。丁度休憩にした、ということ出来たらしい。

ちなみにはやてはヴァル・エイルを連れて食堂まで案内した。エイルが戻ってきた時、盛大に腹が鳴ったものだから、お昼にしよう、ということになったためだ。

「模擬戦は終わったんだけど・・・」

「・・・どうしたの？」

苦笑いをするフェイトになのはは改めて聞く。

「・・・結果がね？ヴァルは普通だったんだ。」

「ヴァル？えーと・・・どっちの子だったっけ？」

「えっと、真っ白な子、って言った方が早いのかな？」

「・・・あ、あの子か！」

どうやら「真っ白な子」で通じたらしい。

「それで、ヴァルちゃんは普通だったんだよね。じゃあもう一人は？」

「・・・見てもらった方が早いかも。」

フェイトはなのはにエイルのデータを見せた。

「・・・これ、ちゃんとやった結果なの？」

「ガジェットの数間違えて出しちゃったんだけど、それでも結果はちゃんと出るはずだよ？」

「適正CでスキルがSS・・・局の中でも聞いたことないよ・・・？」

一方。

「ここが食堂や。」

「広いですね・・・」

食堂を案内される二人。ヴァルは素直に感心しているが、エイルは・
・

「・・・おお・・・」

目が輝いていた。目の前にあるご飯がおいしそうに見えたから。それ以外に理由はない。

「で、どうするん？何か食べたいものあったら言つてな？」

「牛丼食べたいのです！！」

「エイル、落ち着いて！ちょっと意地汚いよ！すいません、こんないきなり・・・」

「ええよ。ヴァルちゃんはどうするん？」

はやてが聞いた瞬間、エイルが咄嗟に言った。ヴァルは謝るが、はやては気にしないといった感じでヴァルにも聞いた。

（エイルが「牛丼が」といったその理由は、ちゃんとあります。バトマスでレーネさんイベントを進めていけば理由が分かります。きつと b y 作者）

「私は・・・お任せします。選んでいたら時間かかったら・・・」

「ほんなら、私が勝手に決めるけど、ええか？」

「はい。」

「おおゝっ!!」

目の前にある牛丼に目をキラキラさせるエイル。

「ヴァルちゃんはナポリタンやで。・・・これでよかったん？嫌なら私のと取り換えっこするけど？」

「いえ、大丈夫です。」

エイルは牛丼を見て・・・いるだけ。最早鑑賞状態。

「エイルちゃん？もう食べてもええんやで？」

「いえ・・・もうちょっと・・・じっと見てます・・・」

牛丼をじーつと見つめるエイル。それを苦笑しながらはやてはヴァルにナポリタンを渡す。

「あ、どうもありがとございます。」

目の前に置かれたナポリタンを、至極当然のように、上品に食べ始めるヴァル。

「エイルちゃんも食べてええんやで？・・・というかいつまで見るん？」

「で、では・・・いただきますなのです・・・！」

なんとなく戦々恐々としながら牛丼の丼を持ち、食べ始めるエイル。

二口ほど食べて・・・箸が止まった。

「エイルちゃん？どないしたん？」

「・・・お・・・お・・・」

「お？」

「おいしいのです・・・！」

目が輝いているエイルにまたはやては苦笑するのみ。ヴァルも苦笑いしていた。その後加速して食べ始めたエイル。勢いは素晴らしい一言に尽きる。

そしてヴァルがナポリタンを半分食べたくらい（この時点で何故か腹八分目な感じがした）に。

お腹空いたねー、ティア。

そうね。なんとなくなのはさんの教導がいつもより大変だった気がするわ・・・

3人の少女と1人の少年がそろそろと入ってきたのだ。まだヴァルが視認できるくらいだが。

「あ、なのはちゃんの教導が終わったみたいやな。せや、紹介せなな。」

「あの、お昼が終わってからでも・・・」

「あっちが気付くってこともあり得るんやで？私が話しかけんでも」

「あ・・・」

それを失念していたヴァル。エイルは相変わらずがついていた。牛丼を。美味しそうに食べてるからいいか、と流すくらいに。

「・・・あ、部隊長！」

そして、自分の食事を持っていた青髪の少女がはやてに気付いた。

「部隊長もお昼ですか？」

「せやよ。みんなもお疲れさん。今日もまた一段ときつい教導やった？」

「はい・・・。あ、あの、部隊長？」

「ん？」

「そちらの二人は・・・？」

オレンジ髪の少女がヴァル達に気付いてはやてに聞いた。その時のヴァルは・・・

（ヴァル：え、ええっ！？あ、アーティル型の声と同じ！？どういうこと！？）

パニックになっていた。

「ああ、紹介せなな。というか本人は皆が食べ終わってからでも、って言うてたけど。」

「は、はあ・・・」

頭の中で盛大にパニックになっているヴァルと、牛井を相変わらずがつついていいる（とはいえ、減っている量はそんなに多くはないが）エイルをよそに、は yet は目の前にいる4人と話していた。

「まずはこつちの子な？彼女はヴァルⅡフロントライン。一応言うておくけど陸戦Aで、今度から民間協力者となってもらった次元漂流者さんや。」

「えと、ヴァルⅡフロントラインです。よろしくお願いします。」

「わあ・・・礼儀正しい人・・・」

「陸戦A・・・つまり、私達の上のランク・・・」

ピンク髪の少女がヴァルの行動に感嘆し、オレンジ髪の少女はは yet の言葉を反芻するように言う。

「で、さっきから牛井をがつついていいるこつちの子はエイル・・・えっと・・・ぶりゅん・・・何やったつけ？ブリュンスタッド？ブリュンスタット？・・・あれ？」

は yet は混乱した。エイルの名字に混乱しているのだ。最後が「ド」なのか「ト」なのかで。

「えと、『ブリュンスタッド』です。」

「あ、そか。ありがとな、ヴァルちゃん。改めて・・・彼女はエイルⅡブリュンスタッドや。・・・ごめんなエイルちゃ・・・って聞

いとらんか・・・」

エイルは相変わらず牛井を（ちょっとずつだけど）がつついていた。無論、夢中になっていて聞いてすらいない。

「えとな、彼女も同じく今度から民間協力者となってもらう次元漂流者さんや。陸戦C・・・なんやけど・・・」

「部隊長？」

言葉が最後に濁るはやてに、赤髪の少年が疑問を伴って聞いた。

「・・・多分、管理局の伝説になるかもしれんや・・・」

「伝説・・・ですか？」

赤髪の少年が恐る恐る、といった感じで聞く。他の三人も同じ感じが雰囲気から見て取れた。

「・・・彼女な？魔力ランクもCなんやけど・・・持つとるスキルが・・・SSなんよ・・・」

「え・・・SS！？」

「びつくりやろ・・・？ヴァルちゃんはAでスキルも同じくらいなんやけどね。魔力はBなんやけど、それを補う戦闘スキルを持つとるんやからな、問題はないんや。」

「た、確かに・・・」

「それに・・・総合ランクが測定不能やったんや・・・」
「そ、測定不能!？」

全員がエイルに驚きを隠せない。というか・・・そんな凄い人と目の前で牛丼に夢中になっている人が一致しない、というのが原因だ
が。

「ああ、そやそや。皆も自己紹介したってや。ヴァルちゃん、ごめんな? ぽかんとさせてもうて。」

「え、あ、その、そういうのは慣れてますから・・・」
「じゃあスバルからな？」

スバルと呼ばれた少女が頷いた。

「えと、スバル・ナカジマ二等陸士です。ランクは陸戦B、ポジションはフロントアタッカーです。」

「ティアナ・ランスター二等陸士です。ランクは陸戦B、ポジションはセンターガードです。」

「エリオ・モンディアル三等陸士です。ランクは陸戦B、ポジションはガードウイングです。」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。ランクは陸戦C+で、ポジションはフルバックです。」

「改めて、よろしく願います。」

ヴァルも返す。しかし・・・

「・・・エイル、一旦食べるの止めて挨拶しよ？」
「・・・んむ？」

この超天然少女・・・エイルは今の今まで牛丼を食べていたのだっ
た・・・

おまけ

「あ、二人のガジェット模擬戦のデータあるんやけど、見たい？」
「見せてもらえるんですか!？」
「スバル!・・・すいません、出来ればいいのですが・・・」
「ええよええよ。んじゃ、再生つと。」

ヴァルの場合・・・

「わぁ・・・凄い・・・」
「的確にガジェットを撃ってる・・・精密さが桁違いだわ・・・」
「あつ、見てください!背中にあったのがなくなってます!」

『これこそ、天駆ける天使の騎馬!グランニューレっ!』

「わぁぁ・・・」

ヴァルの戦闘データは好評だった。

エイルの場合・・・

「・・・別の意味で凄いな、ティア・・・」

「・・・そうね・・・」

スバル・ティアナが呆れるのも無理はない。映っているのは必死になっ
て逃げているエイルだからだ。

「あ・・・建物の中に隠れて・・・な、なんですかあれ!？」

「ミサイル!？ううん、バズーカ!？あれ質量兵器じゃないんです
か!？」

「違うで？あれ、質量兵器に見せかけた魔力砲なんよ。」

「今ので・・・えーと・・・5体ぐらい撃墜したみたいです・・・」

そして追いつめられてから。

『ゲイルスケイグルっ!』

「ぶ、武器を投げた!？あれって槍だよな!？投げちゃって・・・
つてええっ!？」

「ば、爆発した・・・!？」

最後の『ゲイルスケイグルが爆発した』シーンで全員が絶句した。

なお、最大瞬間魔力が叩きだされたのもこの瞬間だったりする。

「な？ エイルちゃんはまだ規格外って言うってもおかしくないやろ？」
「は・・・はは・・・」

はやての言葉に苦笑いで返す他なかったティアナであった・・・

RIDE06 神姫二人、食堂初体験！そしてフォワードと初会合（後書き）

まずは募集の結果発表です。

追加希望のあつた神姫は・・・

型番 DI/AIP-001X2

神姫名称 戦乙女型アルトアイネス（MMS Type Valk
yrie ALTINES）（CV：水橋 かおり）

型番 OSA111

神姫名称 ハイスピードトライク型アーク（MMS Type H
ighSpeed Trike ACH）（CV：堀江 由衣）

です！あと、敵にも参戦要望がありました。 ミミック（CV：喜多
村 英梨）です。あの「ううううううきやあああああつ！！」
なあいつらです。

次回は原作4話あたり。ファースト・アラートまであと少し。

「あれ？リーハは？」と思った方。彼女ももうすぐカッコイイ現れ
方をしてくれますよん。

R I D E S P お正月特番！参戦が決まった神姫達へのインタビュー！

・・・はい、ということで作者です・・・

「（テイル）マスター、一体何が『ということで』なのか、はつきりと分かりませんよ？」

そんな事はどうでもいいわけなので。今回は特別編ということで・

・

「（テイル）私とマスターの二人で、リリストに参戦が決まった神姫二人に、突撃インタビューをしてみようと思います！・・・けれど、突撃で前フリも何もないので・・・」

半分ドッキリになりますね。何の連絡もしてないので。なお、これについてはまた別の話という扱いです。・・・というかテイル、あなたも自己紹介してないでしょ？一体何の神姫なのかも分からないでしょうが。

「（テイル）・・・あ、す、すみません！私、A / c u t e D y n a m i x 製ヤマネコ型M M S アーテイル、型番A c d 0 2 4 | 1 のテイルです！」

O K O K。じゃあ最初のターゲットは・・・

「（テイル）えーっと・・・発売弾順で行くと8弾発売のアーク型が先になりますね・・・あ、アーク型は正式にはO H M E S T R A D A 製ハイスピードトライク型M M S アーク、型番はO S A 1 1 1 です。」

それで、今は何をしていると？

「（テイル）・・・えーっと・・・あ、画像、出ます！今は・・・家の中に作った特設サーキットで一人で走ってるみたいです・・・というか日課らしいです。」

・・・となると・・・邪魔するのもあれですね・・・では、もう一人・・・

「（テイル）ですね。素体はD i o n e C o r p o r a t i o n、

武器は Arms in Pocket という二社の合作、戦乙女型 MMS、アルトアイネス。型番は DI/AIP-0001X2 ですね。・・・あ、突然マミったりしないので安心してくださいね？」

こら、中の人ネタ言わないの。で、今何を？

「（ティル）テレビ見て笑ってます。」

よし突撃！！

「（ティル）了解です！！」

「(????)へー・・・あの人珍しいねー、当てたよ、格○け。」

「(ティル)突撃!」

インタビュー!!!

「(????)わあぁっ!何!?え、マスター!?それにティルも!何なの、一体!？」

唐突ですがインタビュー!今回ある意味神姫の人気投票の形となったアンケートで一番多くの票を集めたので、リリスト参加が決定しました!それについて、意気込みを!

「(????)・・・リリスト?え、何の話?」

「(ティル)あれ、聞いてませんでした?リリストで追加で二人、さらに出るからそれについてアンケートをとったんです。そしたらあなたに多く票が入って決定したんですよ?」

「(????)へー。多分・・・寝ちゃったのかも。」

寝ちゃってたて・・・

「(ティル)え、えーと、気を取り直して・・・まずは自己紹介お願いします。」

「(????)え、自己紹介から?」

「(ティル)だって今、名前の所?になってますよ?」

ティル!色々発言がアウト!!

「(ティル)えっ!？」

・・・と、とにかく自己紹介!!

「(????)えーっと、ボクは型番DI/AIP-001X2の戦

乙女型アルトアイネスのアイリス。ちょっとまだ話が分かんないんだけど、投票してくれた人、ありがと？」

アイリス、何故疑問符？

「（アイリス）だって知らないし。」

「（ティル）・・・ま、まあ、知らないとなると仕方ありませんよ。では意気込みを。」

「（アイリス）・・・あのさ、まず誰がいなのか教えてくれない？ボク何も知らないんだけど・・・」

あ、それもそうですね。いないのはヴァル、エイル、そしてリーハです。

「（アイリス）ヴァルやリーハは大丈夫なんだけど・・・エイルが
！・・・」

「（ティル）と、言うത്？」

「（アイリス）心配なんだよねー、天然して迷惑かけてないかが・
・」

では意気込みを。

「（アイリス）とにかくエイルの天然暴走を抑えるように頑張る！
あとは皆が帰れるようにするだけ、かな？」

ありがとうございました。あとは出演までご自由に。

「（アイリス）へ、もう終わりなの？」

「（ティル）自己紹介と意気込みだけですから。」

「（アイリス）そっか。じゃあボクはテレビ楽しんでるね。」

ということであルトアイネス型神姫のアイリスでした。
「（テイル）次は・・・あ、終わってますね。」
よし突撃！！

「（ティル）あ、いましたー！」

エイリーン、ちょーっとコースインは待ってー！！

「（エイリーン）マスター？それにティルも？一体どうしたのさ？」

ま、間に合った・・・

「（ティル）こ、今度リリストに出ることが決まったので、その意気込みとかを・・・」

「（エイリーン）ああ、あのことが。で、二人でインタビューってこと？」

そういうことです・・・ふう・・・本当に間に合つてよかった・・・

「（エイリーン）じゃあちゃっちゃと済ませるから。あたしはOH MESTRADA製ハイスピードトライク型MMS、型番はOSA 111・アークのエイリーン。あたしに票入れてくれた人、ありがとうね！」

「（ティル）意気込みは？」

「（エイリーン）あのメンバーだとあたしが一番の後釜だから、足引つ張らないように頑張る、ただそれだけさ！」

さすがアーク型、気持ちがいっしょかりしてる！

「（エイリーン）よせやい、照れるじゃないか・・・／／／」

「（ティル）そのしっかりした気持ちで、向こうに行っても頑張ってくださいね！」

「（エイリーン）ああ！」

・・・ということでアイリス・エイリーンへのインタビューでした。
エイリーンは流石HST型と言っただけあってレース関連はしっかり
していました。

「（テイル）アイリスはいつも通りのアイリスでしたね・・・」
とりあえずこれにてインタビューは終了、本編登場をお楽しみに！
！

R I D E S P お正月特番！参戦が決まった神姫達へのインタビュー！（後書き

アルトアイネス型のアイリスと、アーク型のエイリーンの登場はまだまだ先です。

彼女たちの登場をお待ち下さい！！

次回は訓練模様と・・・2話以降姿を消していたあの人が再登場します！

RIDE07 First・Alert (前書き)

リリカルなのはStS第4話部分相当の話です！フォワード+ヴァ
ル&p;エイルの訓練はどうなるのか？それは本編で！！

RIDE07 First・Alert

「はい、せいれーつ。」

なのはの号令に、フォワード陣が並ぶ。遅れること数秒、ヴァルがエイルをラファールに乗せ現れる。

ヴァルとエイルは、まだスターズ・ライティングのどちらに着くかがまだ決まっていなかったため、訓練に参加するが、初任務の動き次第で決める、ということになった。

ちなみに訓練への参加はエイルはほぼ強制で、ヴァルは『鈍ったかな・・・?』と思う所があったので自己参加した。

ヴァルも含め、全員息が上がっており、エイルに至っては目を回していた。着ている服も所々汚れている。

「じゃ、本日の早朝訓練ラスト一本。皆、まだ頑張れる?」

『はい!』

「無理なのですう・・・」

フォワードとヴァルは揃って返事をするが、エイルはもうダメだと主張。しかしなのはは甘くない。

「ヴァル、エイルを起こしてくれないかな?」

「あ、はい。」

ヴアルにエイルを起こすよう言う。（ちなみにこの時呼び捨てにしているのは、年齢的に見てもヴアル達の方が年下であったこと、『ちゃん』付けで呼ばれるのが何処かしらこそばゆい気がしたので止めて欲しいとなのはに頼み込んだから）

「もう限界なのですよ……」

「これで終わりだから、ね？」

諭すように言われ、渋々（本当に渋々と言った感じで。足取りが非常に重く、ゆっくり、のっそりと起きあがる感じ）とラファールから下りた。

「じゃ、シュートイベーションやるよ。……レイジングハート。」
【Alright, Axel Shooter.】

なのはが持つ杖、レイジングハートの機械音声が聞こえたと同時に、なのはの足元から魔法陣が展開、彼女の周囲にピンク色の球体が浮かぶ。

「……私の攻撃を5分間、被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。頑張っていこう！」

『はい!!』

そして、少々の作戦会議。

「・・・5分間、こんなボロボロの状態でなのはさんの攻撃を被弾無しで捌ききる自信・・・ある？」

「ない！」

「同じくです！」

「ヴァルさんは？」

「4分が限界です。でも見た限り私の反応できる限界を超えてくる可能性もあるから・・・おそらく不可能です。」

「エイルさんは・・・聞くまでも無い、か。」

「当然なのです・・・」

「じゃあ、何とか一発入れよう。いい？」

「はい！」

エイルを除く全員でなのはの方を見る。エイルはもう逃げる気満々だった。単純、元々の魔力量が少なかったというのもあるが、その魔力量を一気に消費する武器しか使えないエイルにとって、ガス欠・・・魔力エンプティは目前だった。言い換えれば、魔力枯渇で倒れる事はもう目に見えていた。

「よし・・・行くよ、エリオ！」

「はい、スバルさん！」

「私も・・・行きます！」

スバルが右手を、エリオがストライダーを、ヴァルがM8ダブルライトセイバーをそれぞれ構える。

「準備はOKだね。それじゃあ・・・」

手を振り上げる

「レディー・・・ゴーっ!」

手を振り下ろすと同時に、周囲の球体・・・アクセルシューターが6人めがけて飛ぶ。

「全員、撤退回避!2分以内に決めるわよ!」

「おーっ!」

「お、おー・・・ぴゃーっ!??」

全員が飛んできたシューターを避ける。エイルは枯渇寸前なため、一切の魔力を使わずに恒例のヘッドダイビングで避ける。なのははそれに合わせて当てに行くも、そこはやはり『奇跡で伝説を生んだ乙女』と呼ばれるエイル。一発も当たらないという奇跡を見せた。

「ゲイルスケイグルなんて撃つたら魔力切れで動けなくなっちゃい

ますよぉっ！！」

凄い勢いで建物の影に逃げ込むエイルであった。

「エイル・・・見失っちゃったか・・・。やっぱりエンプティ寸前だから感知も難しいかな？」

周りを警戒しつつも苦笑するのは。その背後に青い「道」が伸びた。

「っ！」

「うおおおおおおおっ！！！」

背後から迫るスバル。別方向からは狙撃狙いのティアナ。

「アクセル！」

【S n i p e S h o t .】

機械音声が発せられるとともに、二発シューターが飛ぶ。一方はスバルに、もう一方はティアナに、だ。が・・・

「シルエット・・・やるね、ティアナ・・・」

二人の姿がかき消えたのだ。そして同時にまた背後に青い道が走る。

「・・・上！」

現れた道からスバルが姿を現す。拳は既に攻撃態勢に入っていた。

「てえりやああああああああっ！！」
「・・・っ！」

なのはが右腕を突きだすと、その先に魔法陣が展開される。その魔法陣にスバルの拳がぶつかった。

その時、既に飛んでいたシューターが軌道を変え、スバルに迫る。

「っ！」

それに気付いたスバルはとっさに回避する。

「うん、良い反応。」

それを褒めるのは。その後スバルは道の上で体勢を崩すも立て直し、迫るシューターから逃げ始めた。

スバル、バカ！危ないでしょ！？

「・・・ゴメン！」

待つてなさい、今撃ち落とすから！

別の場所では、ティアナが銃を構え、スバルを追うシューターに狙いを定める。

そして、引き金を引く。・・・が。

ガキン！

「ええっ！？」

銃は撃てなかった。

わっっ！ティア、援護っっ！！

「・・・この肝心な時に！！」

ティアナの援護がなくなるスバルと、急いで弾を入れ替えるティアナ。その二人に念話が入る。

私が撃ち落とします！ティアナさんは焦らず弾を入れ替えて、スバルさんは3時の方向に走り、準備完了の合図をしたら3カウントでジャンプしてください！撃ち落とした後、一気に勝負を着けます

！

「すいません、お願いします！」

ヴァルからの指示とも取れる援護を受け、ティアナは冷静に弾を入れ替え、スバルも同じように従う。

「・・・アルヴォ！」

ヴァルはなのはからは感知し辛い位置の廃屋内にいた。そこでハン
ドガン・アルヴォPDW11を呼び出し、魔力を込める。

「スバルさん、準備できました！」

そして、スバルに指示をした。

「・・・3・・・2・・・1・・・たあっ！」

そして、シューターに撃った。

スバルさん、準備できました！
(来た！)

ヴァルの念話でスバルも3カウントを始めた。

「
．．．3
．．．2
．．．1
．．．はっ！
」

タイミングを見計らって跳躍。その瞬間、白色の魔力弾がスバルの足を抜け、シューターに直撃して消えた。シューターも相殺されてなくなっている。

スバルさん、なのはさんの後方45度直線状に誰かいますか！？
「・・・いません！」

目くらまし程度になってくれればいいんです、決定打はエリオ君に一任します！あとで回収お願いします！
了解しました！

エリオからの了承を伝える念話を最後に、ヴァルは念話を切った。

「総魔力量の大半を消費してやっと撃てるこの大技・・・魔力量が
少ないこの状況で撃つのは自殺行為にも等しいものですけど・・・
勝つためなら・・・犠牲もやむなし、です!!」

【アークブラスト、発射準備完了。何時でもいけます。照準補正、
反動制御、魔力制御はどうしますか?】

「照準補正、反動制御はお願いします。魔力制御はこの際一切無視
で!!」

【了解しました。アークブラスト、フルバースト・・・チャージ完
了。】

「エリオ君、あとは任せました・・・!アークブラスト・・・行
きます!!」

「ヴァルさんの大技がなのはさんに放たれるのを合図にして・・・
エリオ君、いきます！」

「キャロ、お願い！」

なのはの下、アークブラストが当たらない位置で、エリオとキャロは立っていた。なのはは彼方に感じた魔力反応を感知し、そっちに意識がいつている。

「・・・来た！」

「・・・我が乞うは、疾風の翼・・・若き蒼騎士に、駆け抜ける力を・・・！」

【Boost up: Acceleration!】

なのはがプロテクションでアークブラストを止め、その隙を突いてキャロがストラーダを強化、突撃を仕掛ける、という戦法だった。

丁度ストラーダが突撃を仕掛ける刹那、ヴァルはアークブラストを止めた。・・・いや、撃ち続けられなくなった、と言った方が正しい。

「あの！かなり加速がついちゃうから、気をつけて！」

「大丈夫！スピードだけが取り柄だから！行くよ、ストラーダ！」

ストラーダはブーストを吹かし、何時でもいけるようになった。そ

の間、なのははティアナからの援護射撃を避ける。

「キュクーっ！」

「っ！」

避けた所にフリードからの火炎が飛ぶ。それを避けた時、準備万端となったエリオが視界に入った。エリオとなのはの位置は、丁度直線上。

「エリオ、今！」

ティアナの指示を受け……

「いっけえええええええっ！！！」

【Spear attack】

エリオは飛んだ。

そして、
なのはと衝突した。

一方、エイルはというと・・・

「・・・あ、あれ・・・？シューターが飛んできて避けれるよう

にしてたら・・・眠たくなってきたのです・・・」

【Master, Empty.】

「魔力・・・切れ・・・やっちゃったのです・・・」

シューターを必死に感知しようとしていたら魔力切れになってしまったのだった。

なのはと衝突したエリオ。

「うわあああっ！」

弾かれ、近くの廃屋で体勢を立て直す。

「エリオ！」

「外した！？」

黒煙が消え失せた先には、無傷のなのはがいた。
・・・が。

【Mission complete.
「お見事。ミッションコンプリート。」】

なのはがそう告げた。

「本当ですか!?!」

それにエリオが信じられないと言った顔で聞く。

「ほら、バリアを抜いて、ちゃんとジャケットまで通ったよ。」

自分の脇辺りを指すなのは。そこにはちゃんと攻撃の痕があった。それを見た時、フォワードの顔に喜びが浮かんた。

「それじゃ、今日の早朝練習はここまで。一旦集合しよ。」

「はい!」

「ヴァルもエイルも戻ってきてね。」

・・・あの、申し訳ないんですが・・・

「ヴァル?」

「・・・あ。」

ヴァルからの通信を聞いて、スバルが先程のヴァルの念話を思い出した。

「すみません、ヴァルさんから『後で回収頼む』って言われてたの忘れてました!すぐ行ってきます!!--」

スバルはヴァルの回収に大慌てで向かった。

「……んー……やっぱりエイルと連絡が取れないんだけど……
どうしちゃったんだろ？」

エイルと連絡が取れず、どうしようか困っていたなのはの元に、連絡が入る。

【Ms Nanoha . Master was already
empty.】

「あちゃ、やっぱり魔力切れしちゃったか。」

この後、魔力切れ寸前だったヴァルと、ガス欠を起こして眠っていたエイルが回収され、すぐに医務室へと運ばれた。同時にスバルのローラーが壊れ、フォワードに新デバイス受け渡しが告げられた。

そしてなのはとフォワードが昼からのことを話していた時にはやてがフェイトの車で聖王協会に向かう所と会い、少し話をして向かった。

「ヴァルちゃんは初めてだけど・・・エイルちゃんって本当にこの常連さんになっちゃいましたね。」

「シャマル先生・・・言わないお約束です、それ。」

「ヴァルちゃんも、あまり無茶したらダメですよ?」

「肝に銘じておきます・・・」

「それと、あの時使ったアークブラスト、本当に使わないといけない時以外は使っちゃダメですからね?」

「・・・はい・・・」

その頃、郊外では・・・

「すまないが、そのリニアに乗せてもらえないだろうか？」

「とはいってもね、これは貨物用だから・・・」

「その貨物の護衛もすると言ったらどうだ？」

「・・・それなら・・・いいか・・・。最近ガジェットが出てきて物騒だからね、護衛が出来るならよろしく頼むよ。」

「（ガジェット・・・？）・・・ああ。」

貨物用と言われるリニアに乗りこんでいたのは、クールな顔立ちとツインテールが特徴の女性。彼女は一向に街に着けず、たまたま目に入ったリニアに乗せてもらおう、と考えていたのだ。なお、無一文だったため、乗り逃げするつもりでいたのだが、貨物用だったということと護衛を引き受けたことで関係なく乗ることが出来た。

「・・・ヴァル・・・お前は今、一体何処で何をしている・・・？」

リニアの窓から外を眺め、女性はそう呟いた。

（さすがにあたしが認めた・・・という自惚れにしか聞こえないが・・・実際にあたしが唯一ライバルだ、と認めた存在だからな・・・）

「あのー・・・シャル先生？」

「はい？」

「自分の感覚で魔力もだいぶ回復した気がするんですけど・・・。

・・特にエイル・・・」

「確かに魔力はもう回復したのは分かってます、エイルちゃんはよくここに来てるからしっかり体を休めていられるけど、ヴァルちゃん全然休んでませんよね？」

「そ、そんな事無いですよ？しっかり8時間眠ってますし、栄養も偏りなく取ってますし・・・」

「けど、それを上回る肉体疲労が出ましたよ？ヴァルちゃん相当無茶してるんじゃないかって思うんだけど・・・」

「そ、そんなことは・・・」

と言い返そうとした瞬間、ヴァルの目の前に【ALERT】の文字が。

（実際に見た時、なぜRがひっくり返っているのかが凄い気になりましたby作者）

「ぴゃっ!？」

「アラート・・・このパターンだと確か第一級警戒態勢！すいませんシャル先生、ゆっくり休んでいる暇がないみたいです！」

「・・・どうしてこういう時に限って敵が出てくるんでしょうね・・・」

近くに置いてあった服をしっかりと着て、ヴァルは廊下を駆けだした。とりあえず先ず向かったのは、自分のデバイスが預けられてい

るであろう、デバイスルーム。

「指令があるかもしれない、連絡用の回線をつないでおかないと・・・！」

今もなお【ALERT】の文字が表示される目の前のディスプレイを走りながら操作し、連絡用回線をつなぐ。その数秒後だった。はやてからの指令が来たのは。

なのはちゃん、フェイトちゃん、グリフィス君、こちらはやて！
うん。

状況は？

教会騎士団の調査部で追ってた、レリックらしきものが見つかった！場所は、エーリム山岳丘陵地区、対象は山岳リニアレールで移動中。

移動中って・・・

まさか！？

「移動中」という言葉を聞き、なのは・フェイトの頭に嫌な予感が浮かぶ。

・・・そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは、最低でも30体。大型も飛行型も、未確認タイプも出てるかもしれない。おまけに・・・

まだ、何かあるの？

民間人かは分かんけど・・・人が一人、そのリニアール内に乗りこんどるんや。ガジェットを連れ込んだ主かも、関係のない民間人かも、荷物の護衛を引き受けた人かも分からへん。犯人やつたら確保、それ以外の場合は救助を・・・いきなりハードな初出動やけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか？

私は何時でも。

私も。

スバル、ティアナ、エリオ、キヤロ、皆もOKか？

はい！

なのはちゃん、魔力エンプティで倒れたヴァルちゃんとエイルちゃんはどうや？

まだシャルマル先生からは何も「割り込み失礼します！」ヴァル！？大丈夫なの？

倒れたヴァル、エイルを心配するはやと、何も聞かされていないなのはの会話に、ヴァルが突如割り込みを入れる。

「元々の総魔力量が少なかったおかげで、魔力も全回復しました！すぐ行けます！」

なら行けるな。シフトはAの3、グリフィス君は隊舎での指揮、

リインは現場へ！

はい！

なのはちゃんフェイトちゃんは現場指揮！

うん！

ほんなら・・・機動六課フォワード部隊、出動！

はい！！

「すいません、遅れました！」というヴァルの声と共にヴァル・エイルがヘリポートに現れ、すぐに乗り込む。デバイスはなのはが持つてきていた。

「新デバイスはぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね。」

「はい。」

「頑張ります！」

「エリオとキャロ、それにフリードも、しっかりですよ！」

『はい！』

「ヴァル、病み上がりで悪いけどガジェットの撃破に苦戦していたならすぐに助けに行き、そうでなければ遊撃。頼めるかな？」

「大丈夫です。今回はそうそう魔力切れを起こすこともないので。」

「エイルはレリックと思われる物の回収を優先して、終わり次第同乗者の確認、救助対象ならすぐ助けに行く。いける？」

「は、はい、多分・・・」

「危なくなったら、私やフェイト隊長、リインにヴァルがカバーするから、おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよ！」

『はい！！』

その後、緊張しているキャロを気遣うエリオ、自分の新しい相棒を見つめるティアナとスバル、リインに落ち着くよう諭されているエイルを他所に、ヴァルは外を見ていた。

(・・・リーハ・・・もしあなたがリニアレールに乗っているのなら・・・せめて敵であってほしくないと・・・そう、願っています・
(・・・)

RIDE07 First・Alert（後書き）

今回は5話「星と雷」相当の内容になります。そして、ついにあの人が参戦します！！そう、2話で思いっきりガジェット的大量破壊をしてくれたあの人が！

後、ちよつと思つた事を一つ。

アイリスとエイリーンの参戦、何時頃にしましょうか、ということです。

ネタとしてやりたいのが

「・・・ボクは何も突っ込まないからね。言いたいことも要求したいこともないからね！ないっいたらないっいたらないからね！！」

なんです。聞いたことある人はいると思います、アイネスの魂の叫び（笑）。別名、『ミズハスの叫び』。どうしてもやりたいネタなんですよ、これ。はやてとの絡みで。

なので、一番やりやすそうなのが『出張・機動六課！！？ 緊急捜索任務in海鳴市？』。言わずと知れたStSサウンドステージ01の話です、はい。そこでなら一番やりやすいかなー、と思つて。だつて・・・ねえ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3847x/>

武装神姫 Lilycal Strikers

2012年1月15日01時56分発行